



### 八丈岩

八丈岩には、夜叉ヶ池に関わる古い伝説が伝わる。美濃国安八郡平野庄の郡司・安八太夫安次の娘は、揖斐川上流に住む龍神との約束によって、龍神のもとへ嫁ぐこととなった。娘は若者に姿を変えた龍神に伴われ、揖斐川上流の池—すなわち夜叉ヶ池—へと至る。ところが龍神にはすでに本妻がいた。本妻は娘の存在に激怒し、大蛇に姿を変えて池から飛び出すと、八丈岩の真下に口を開ける穴に潜り込み、「娘が安八へ里帰りする際、この付近を通るならば岩を落として押し潰してやる」と言い放ったという。

結局、娘が里帰りすることはなかったが、安八太夫安次の子孫（現在は石原姓を称し、神戸町に存続）は、夜叉ヶ池に参る際、いまなお八丈岩の近くを避けて通る習わしがあるとされる。別伝では、嫉妬に駆られた二人の龍女が争い、尸羅（しら）が夜叉を八丈岩で襲ったと語られる。また尸羅が籠る白石山の洞窟の池は、龍宮へ通じているともいう。地域に連綿と受け継がれる水神信仰や境界観を物語る伝承である。



### 三輪神社

創建年代は未詳であるが、現在の鎮座地（揖斐郡揖斐川町三輪）は、奈良時代には大野郡大神郷（おおみわごう）として記録される。氏子区内には口分田跡が広く認められ、『続日本紀』に見える三輪氏の八蹄馬献上の記事からも、古代における当地の重要性と三輪氏の勢力をうかがうことができる。社伝によれば、神武天皇の御代、三輪氏が諏訪大社祭神・武御名方富命（たけみなかたのとみのみこと）を祀ったのが当社の始まりとされ、創建当初は播隆山の中腹に鎮座した。

その後、三輪氏は農耕を基盤に美しい耕地を拓き、勢力を拡大した。近畿中部における三輪氏は有力豪族として知られ、美濃国内にも「三輪」「美和」「大神」等の地名・人名が広く残る。中世に入り神仏習合が進むと、当社は天台宗の守護神として厚い崇敬を受けた。延暦22年（803）には、最澄が自作の薬師如来像（比叡山延暦寺の像と同木と伝わる）を背負って諸国を巡る途上、当地で三和次郎大夫藤原助基と出会い、横蔵寺を建立したと伝えられる（のち比叡山が戦災で焼失した後、本山復興のため当寺の御神像が遷されたという）。

また、西国三十三番札所・谷汲華厳寺の僧も、明治維新の神仏分離まで当社拝殿で毎年大般若経を拝読した。これに伴い奏上された南北朝期の手書き大般若経が、いまも当社に伝来する。

本殿は正和4年（1315）に再建。天正5年（1577）には斎藤道三旧臣・堀池千代壽丸により現在地へ遷座された。さらに慶長7年（1602）には揖斐城主・西尾光教、寛文12年（1672）には揖斐陣屋の旗本・岡田善政が修復を施している。昭和34年（1959）の伊勢湾台風では大木倒壊により大きな損傷を受けたが、昭和36年（1961）に可能な限り旧材を再用し、鎌倉期の姿を踏まえて再建された。歴代領主の崇敬のもと、境内は整備・拡張され、今日の景観を形づくっている。



### 揖斐祭（いびまつり）

三輪神社では毎年5月4日に例大祭、5日に神輿渡御が執行され、両日にわたり山車（だし）と稚児歌舞伎が奉納される。各町内の豪華絢爛な五輦の山車が境内に勢揃いし、その上で子ども歌舞伎が披露される光景は壮観である。神輿渡御では、本社の大神輿三基に加え、各町内から青年・子供神輿十一基が賑やかに町内を巡行する。

山車の由来は、当地を領した旗本・岡田善諧が幕府御旗奉行に任ぜられたことを祝い、各町が造り物を競って神輿の先導を務めたことに始まると伝わる。山車芸は、高砂車山（上町）、住吉車山（中町）、鳳凰車山（下町）、竜宮車山（上新町）、市車山（下新町）の五基が当番制で継承。神輿の前身にあたる奉納品に正徳4年（1714）の銘が残ることから、少なくともこの頃には現在の祭礼形態が整っていたと考えられる。揖斐祭は岐阜県指定重要有形民俗文化財である。



### 播隆院一心寺

西美濃三十三霊場第七札所。本尊は阿弥陀如来。江戸時代後期、伊吹山で修行中の播隆(ばんりゅう)上人を揖斐に招いたことを縁起とする。天保以前、揖斐城主・岡田家の家老・芝山長兵衛が上人のために阿弥陀堂を建立した(天保元年前後、口伝では天保元年に先立つ文政13年～天保初年頃、記録上は1830年の建立を伝える)。阿弥陀堂は第一期揖斐城址南の丸に置かれた。

播隆は槍ヶ岳開山の偉業で知られるが、登山中の負傷が悪化し、美濃太田で没(天保11年<1840>)。行年は59とも55ともした。墓所は美濃太田(祐泉寺)に加え、郷里の富山、そして当寺にも設けられており、三所に分祀される。境内には春秋彼岸に公開される「地獄絵図」が伝わり、近年まで尼寺として知られたが、現在は無住である。



### 播隆上人

天明6年(1786)、越中国新川郡河内村(現:富山市大山地区)に一向宗門徒の家に生まれる。修行の場を山岳に求め、南宮山奥の院・伊吹山をはじめ、護城山(福井県坂井市丸岡町)、片知山(岐阜県美濃市)、伊木山(各務原市)、迫間山(関市)、三鉢洞(加茂郡八百津町)、東ヶ山(七宗町)、さらに長野県松本市・女鳥羽の滝など、各地で念仏行に励んだ。

文政6年(1823)には笠ヶ岳に登拝し、山頂でブロッケン現象(ご来迎)に遭遇、阿弥陀如来の顕現として深く帰依した。文政9年(1826)、信濃国・玄向寺の立禅和尚の斡旋で安曇郡小倉村(現:安曇野市三郷)に逗留し、村役人・中田九左衛門の支援を得る。案内役・中田又重郎とともに大滝山・蝶ヶ岳を経て上高地に入り、梓川を遡行して槍沢の岩屋を拠点に偵察登山を実施。その後二年を費やして浄財を募り、文政11年(1828)7月20日(旧暦)に槍ヶ岳初登頂を成し遂げ、厨子を設け阿弥陀如来・観世音菩薩・文殊菩薩の三尊を安置した。

上人は自らの登頂にとどまらず、多くの人が安全に山頂を拝めるよう、難所に大綱・鉄鎖を設置するなど登拝路の整備に尽くした。天保の大飢饉の折には工事を巡り反対も受けたが、のちに再開。晩年は美濃可児郡兼山の浄音寺を拠点に布教を続け、天保11年(1840)、美濃国太田(現:美濃加茂市)の脇本陣・林市左衛門宅で遷化。「世の人の 恐れ憚る 槍の穂も やがて登らん われ始めて」の歌碑が祐泉寺に残る。



### 揖斐城跡

美濃・尾張・伊勢三国守護・土岐頼康の弟・頼雄の築城と伝えられる。南北朝期の軍忠状から、奥美濃または越前方面からの侵入に備える要衝であったことがうかがえる。天文16年(1547)、六代・土岐光親の代に斎藤道三の攻撃を受け落城。その後、斎藤氏の被官であった堀池氏が入るが、天正11年(1583)、稲葉一鉄の急襲により再度の落城をみた。



### 清水(きよみず)城跡

築城年代は確定しないが、天正年間(1573~1592)初頭、稲葉良通(一鉄)が平地城郭として清水城を築いたとされる。永禄8年(1565)には、曾根城主・稲葉良通が後川の山上にあった旧清水城主・加納江津右衛門を攻め、江津右衛門は自害、子の武蔵右衛門は良通に降った。のち一鉄は山上の清水城を破却し、内外の堀をめぐらせた平城の清水城を新造、曾根城から移った。

一鉄の死後、嫡子・稲葉貞通が曾根城を継ぎ、清水城は長子ながら庶流の稲葉重通が相続して一万二千石を領した。重通は小田原合戦に豊臣方として従軍、朝鮮出兵では名護屋に布陣。子の通重は関ヶ原当初こそ西軍に属したが、のち東軍に与して本領安堵。しかし慶長12年(1607)に狼藉事件で改易となり、城も廃された。

一鉄が清水へ移ってから重通・通重に至るまでの居城期間は天正7年(1579)から慶長12年(1607)までの28年間。東の門近くに自生する「はなのき」(カエデ科。東濃等に自生する絶滅危惧種)は、一鉄が築城の折に植えたものと伝わる。寛文10年(1670)には揖斐陣屋が岡田氏により築かれ、以後明治維新に至るまで当地支配の中心となった。



### 清光山月桂院

西美濃観音霊場第四番札所。稲葉一鉄は清水城北麓に妻の邸を構えたが、天正9年9月19日に妻が逝去、法号を弘徳院殿月桂周芳大姉とし、邸の西に葬った。翌天正10年春、一鉄はこの旧邸を菩提のため寺とし、小林山月桂寺を創建。のち天正16年11月19日に一鉄自身も清水城にて病没し、妻の墓に並んで葬られた。

後に清水城は長男・兵庫頭重通が継ぐも慶長3年に没し、甲斐守通重が相続。しかし慶長13年の改易に伴い、寺も荒廃したと伝わる。



### 牛洞陣屋跡

戸田氏胤により築かれた陣屋。大垣藩戸田氏(寛永12年<1635>以降)の初代・氏鉄の六男・氏照が四千石を分知され牛洞戸田氏を創始。氏照の子・氏胤は弟・氏道に五百石を分地して深坂陣屋を構え、自らは牛洞陣屋を本拠として三千五百石の旗本となった。

牛洞戸田氏は代々続き明治に至る。分家の深坂戸田氏は五百石の旗本として六代を重ね、幕末の六代当主・戸田伊豆守氏栄は浦賀奉行・大坂奉行を歴任。嘉永6年(1853)には浦賀でペリー提督と会見したのち、大坂奉行に昇任したが、のち毒殺されたと伝わる。



### 衣斐丹石流(いび たんせきりゅう)

別称・天台東軍流。永禄年中に衣斐丹石入道宗誉(丹石軒)を祖とする剣術流派で、西美濃十八将に数えられる家柄の系譜をもつ。遠祖・沼田法印は念流祖・慈恩の高弟と伝わり、家伝として念流が継承されていた可能性が高い。宗誉は東軍大僧正に学び、摩利支天の口伝を継承、当初は「支口伝流」と称したと『剣術系図』に注記がある。術は東軍流・新陰流・富田流を折衷し、具足剣法の剛健を特色とする。宗誉は加藤清正・織田三吉郎・小出右京大夫・堀監物ら諸大名に指南し、その流裔は山陰・山陽・筑前などに広く伝播した。宗誉の子・衣斐市左衛門光栄は土佐山内家に仕え、子孫をのこした。



### 野村城跡

『新撰美濃志』によれば、弘安年間(1278~1288)頃に野村常陸介が居住。『野村村誌』では、承久の乱後の延元3年(1338)にも同人の在城が見える。南北朝の争乱では南朝方に属し、野村山山頂の赤ザラの地(花崗岩風化土)上方に本城、城塚・室塚に出城を配した。北朝方・土岐一族の鷲見忠保と籠城戦を展開し、約一か月で落城したと伝わる。



### 織田河内守邸跡

慶長5年(1600)の関ヶ原合戦での戦功により一万石を領した織田長孝(織田有楽斎長益の長男)が、野村藩を立て邸宅を営んだ。しかし寛永8年(1631)、子の織田長則が嗣子なく没して改易となり、野村藩は二代32年で断絶した。



### 野村もみじ

織田河内守邸跡は、園芸品種「野村モミジ」発祥の地として知られる。野村モミジは、春の新芽が鮮紅色で、成長とともに紅が淡み、緑や紫を帯び、夏に緑または緑紫色、秋には黄紅~紅へと移ろい、晩秋の落葉までに「七度色を変える」と称される。

伝承によれば、関ヶ原の功により多芸郡金屋村(現・養老町)から野村に移封された織田長孝が、養老山中で見出し金屋で愛培していた楓の一株を邸内に移植したのが始まりという。織田家断絶後も旧邸跡には多くの文人墨客が訪れ、野村モミジを詠んだ詩歌を残した。原木は幹囲およそ五尺(約1.5m)に達したが、享和~文化年間に枯死。二代目も昭和20年頃に惜しくも失われ、現在は三代目が植え継がれている。



### 織田有楽斎(長益)

関ヶ原合戦では東軍に属し、長男・長孝らと兵450を率いて転戦、宇喜多・石田勢の横撃部隊などを撃退するなどの功を挙げ、大和国内に三万二千石を与えられた。茶の湯では千利休に学び、利休十哲に数えられ、後年は有楽流を創始。茶風は「客を饗す」を旨とし、古人に学びつつ創意工夫を重ねた。京都・建仁寺正伝院を再興し、建立した茶室「如庵」は国宝に指定される。

ツバキの品種「太郎冠者」は別名「有楽」とも称し、長益の偏愛に由来する(学名 *Camellia uraku Kitamura*)。東京都千代田区の「有楽町」は、長益の号「有楽」にちなむ地名で、徳川方に与したのちに拝領した屋敷地(数寄屋橋門外)が「有楽原」と呼ばれたことに起源をもつといわれる。



### 有楽椿(太郎冠者)

江戸時代には「太郎冠者(かじゃ)」の名で呼ばれ、織田有楽斎が茶席の花として愛用したことで知られる。京都では「有楽椿」、江戸では「太郎冠者」と称する。侘助系に分類され、室町期に中国より渡来した原種(*Pitardii*=西南紅山茶。四川・湖南・広西・雲南の標高800~1,800mに自生)と日本のヤブツバキとの雑種と考えられる。

12月から4月の早咲きで花期が長い。一重のラッパ咲き、淡紅に紫を帯びる独特の色合いは、赤いヤブツバキになじんだ当時の人々にとって新鮮で、将軍家・公家・大名など上流階級に珍重された。



### 野村陣屋跡

明暦元年(1655)、大垣藩第二代藩主・戸田氏信が弟・戸田氏経に新田四千石を分地し、氏経は本家分と合わせ計六千二百石の旗本となる。元禄元年(1688)には氏経の孫・戸田氏成が大垣藩よりさらに三千石の新田を分地され、一万石の大名として大垣新田藩(畠村藩)を立て、三河国畠村(現・愛知県田原市)に陣屋を構えた。明治2年(1869)、第十代・戸田氏良の時に三千二百石の加増があり、陣屋を美濃国野村に移して野村藩が成立したが、廃藩置県により野村県へと改編された。



### 大御堂城跡

現在の公郷集落一帯は、江戸初期まで「大御堂村」と称された。大御堂城は永禄元年(1558)に竹中遠江守重元が菩提山城(垂井町)へ移るまで、竹中氏の拠点であった。重元は豊臣秀吉の軍師として知られる竹中半兵衛重治の父で、半兵衛は本城に生まれたとされる。

当地を治めた旗本・加藤平内は、城跡東の月真寺を菩提寺と定め、正徳4年(1714)にこの城跡を寺領として寄進した。加藤氏の始祖・光泰(嫡男・貞泰は美濃国黒野藩主を経て伯耆国米子、のち伊予国大洲初代藩主)は、かつて半兵衛に一命を救われた縁から、娘を半兵衛の子・重門に嫁がせており、竹中氏と加藤氏は姻戚関係にあたる。



### 神風院釈暢夫碑(しんぷういん しゃくのぶおひ)

岐阜県揖斐郡大野町牛洞の一角には、「神風院釈暢夫碑」と刻まれた慰霊碑が建てられています。この碑は、大野町出身の谷暢夫(たに のぶお)少尉を追悼するために建立されたものです。

谷暢夫は、大正13年(1924)6月、当地に生まれ、浄土真宗の家庭に育ちました。

学業を経て昭和17年に海軍土浦航空隊へ入隊し、戦闘機搭乗員として訓練を重ねました。

その後、松山海軍航空隊を経て「神風特別攻撃隊 敷島隊」に配属され、昭和19年(1944)10月25日、比島沖海戦において第三番機として出撃し、わずか二十歳の若さで戦没しました。

谷少尉は、特攻作戦の最初期に命を捧げた五名の若き搭乗員、すなわち「五軍神(ごぐんしん)」の一柱として知られています。

五軍神は、敷島隊隊長・関行男大尉を筆頭に、谷暢夫少尉、大黒繁男少尉、永峰肇少尉、石野節雄少尉の五名を指し、日本各地にその名が顕彰されました。

彼らは神風特攻隊の象徴的存在とされ、戦中には「軍神」として広く報じられました。

碑に刻まれる「神風院」は特攻隊にちなむ号であり、「釈暢夫」は仏門における戒名です。

辞世の言葉として残された「身は軽く つとめは重きを思うとき 今は敵艦に ただ体当り」は、若き搭乗員が己の命を国に捧げる覚悟を示したものとして伝えられています。

この碑は、地域から送り出された若者の姿を後世に伝えるものであり、戦争の記憶と平和の尊さを語り継ぐ史跡として、大野町の人々により大切に守られています。